

# シンレッドラインの存在は「未来は開いている」という直観と両立

## 可能か

梅原 温史 (Umehara Atsushi)

千葉大学大学院 博士後期課程

現代の時間論におけるトピックの一つに、未来言明の真理をどのように説明するかという問題がある。有名なアリストテレスの宿命論では、「明日の海戦」に関する言明について、それが「現在」真であるか偽であるかが問題となっている。本発表ではこの未来言明の真理値をめぐる問題について、未来を分岐した枝として捉える「分岐理論」と呼ばれる立場のなかのさらに「シンレッドライン(The Thin Red Line: TRL)」の存在に焦点を当てる。この TRL は分岐した枝の中の「確定した枝」を意味するが、こうした確定した枝の存在は「未来は開いている」という直観と両立しないという議論がなされている。しかし先行研究では *de re* 様相と *de dicto* 様相の区別を用いた「確定性の分類」がなされていない。本発表の目的はこれらの区別を用いることで「シンレッドラインの存在」と「未来の開き」の直観を両立させることができると示すことにある。なお本発表ではこの TRL の存在を認める立場のことを、一般的な言い方ではないが、「TRL 論: TRL 論」と呼ぶことにする。また本発表を通して発表者は、いくつかある時間の理論のなかで「成長ブロック説 The Growing Block Theory : GBT」を前提とする。

これまでこの未来言明の真理に関する問題に対して「二値論理」や「三値論理」、「超付値論(The supervaluationism)」による方法などが提示されてきたが、ここ最近の流れとしては「分岐理論(The Branching Theory)」による方法が主流になってきており、超付値論と TRL 論はここに分類される。

未来言明の真理をどの立場から説明するにしても、その与する立場や理論が日常的な直観と両立するようにして説明がなされなければならない。日常的な直観のひとつに「過去は閉じていて、未来は開いている」というものがある。これは「過去はもはや変えられないが、それとは反対に未来はいかようにもなりうる」ということを意味する。

分岐理論はこうした直観を維持できる。分岐理論では過去から現在までを一本の数直線で表し、現在から未来にかけてはいくつもの可能性を表すものとしての「枝」が分岐しているというイメージで捉えられる。Torre(2011)によれば、この分岐理論のなかの超付値論と TRL 論の対立点は、分岐した枝のなかに「確定した枝」を認めるか否かで対立している。前者によれば、分岐したすべての枝は互いに同等であり、そのなかで特権化された枝は存在しない。他方の後者は、反対に、特権化された枝の存在を認める。

超付値論者の一人に MacFarlane がいる。彼によれば「分岐」という描像と「確定性」という考えは両立せず、その場合、未来は「開いていない」ということになる。本発表ではこの「分岐」と「TRL」の存在は「未来が開いている」ということと両立可能であるという立場をとる。すなわち、未来は分岐としての身分をもつものなのであるが、たとえその分岐した枝のなかに「確定した枝 (TRL)」が存在していたとしても、それでもその

枝はその時点では「可能的」な枝にすぎないと主張できることを示すことに目的がある。TRL 論を擁護する論者に Barnes&Cameron がいる。彼らは MacFarlane に対し、「確定性」の意味を二つに分け、未来は確定しているがそれは「形而上学的な確定性」ではないと論じることで応答をしている。Rosenkranz (2013)は確定性に三つのバリエーションを提示し、Barnes&Cameron の「形而上学的確定性」を彼らが提示する確定性の二番目の意味のものであることを述べている。

しかしどの論者も確定性という概念における様相的側面を見落としてしまっていることを指摘できる。ある事象  $p$  が「確定的である」と言うときのそれは、事象  $p$  が生じるのは「必然的である」と言い換えることができる。この「必然的」という概念は「可能的」と対をなすものである。したがって「確定性」は様相的側面をもつ。そしてこうした様相には、これまで、「de re 様相」と「de dicto 様相」の二種類のものが見出されてきたが、Barnes&Cameron(Rosenkranz も含め)はこの点を見過ごしてしまっている。

MacFarlane は TRL の存在を認めることは「未来は開いている」という直観を放棄することになると論じ、それ以降、こうした TRL のような「確定性」が分岐理論でも両立するかどうかの問題となってきた。しかしここで挙げた様相の二つの区別を用いれば、たとえ TRL の存在を認めたとしてもそれは de dicto 様相としての確定性しかもっていないと主張することができる。そして「過去が確定している」というのと同じ意味で「未来は開いていない」と言いたいのであれば「その確定性は de re 様相としての確定性でなければならない」とすれば、「未来は開いている」という直観は維持可能であると言えるはずだ。というのも、de dicto 様相によって表現されるのは「命題における確定性 (必然性)」であって「存在における確定性 (必然性)」ではないからだ。

こうした考えは GBT と整合的である。GBT によれば、過去から現在までの全ての出来事とその存在論に組み込み、未来の存在は組み込まない。GBT は「過去」を現在と同じくらいリアリティのあるものとして捉える。したがって過去は固定的/具体的である。他方で未来は存在しないので、未来に関する偶然的な言明の真理を捉えるために、GBT では分岐理論を採用することができる。そしてたとえ TRL が存在していたとしても、その場合の確定性は de dicto 様相としての確定性であり de re 様相としてのものではないので、そのとき言われている「未来」は固定的/具体的ではない。したがって「過去と未来の非対称性」という図式を保ちながら、TRL の存在を認める図式のもとでも「未来は開いている」は両立させることができるということが本発表の結論である。

#### ・参考文献

Barnes & Cameron, (2009). “The Open Future: Bivalence, Determinism and Ontology” . *Philosophical Studies* 146: 291-309.

MacFarlane, (2003). “Future Contingents and Relative Truth” . *Philosophical Quarterly* 53: 321-336.

Rosenkranz, S. (2013). Determinism, the open future and branching time. In *Correia and Iacona (2013). Around the tree. Semantic and metaphysical issues concerning branching and the open future, Synthese Library361*.Heiderberg: Springer pp. 47-72.

Torre, Stephan. (2011). “The Open Future” . *Philosophy Compass* 6: 360-373.